

## 第五十三回 顎関節症は世界的に治せない理由

①頭蓋骨の骨の中央に位置する蝶形骨の骨の翼状突起は口の中から触れる事が出来ます。上顎の左右の歯を左右の親指の指先で前から奥へ指ですべらせますと一番奥の歯を越えて、さらに歯肉のドテを超えてさらに1cm～1.5cm奥に親指の指先をもっていくと必ず左右に小さなポツンとした突起に触れるものです。

これが蝶形骨の翼状突起です。人差し指でやりますと吐きそうになりますので注意して下さい。

この蝶形骨は頭蓋骨の主要な骨と接しています。

頭のテッペンの中頭頂骨、後側の後頭骨、左右別々の耳の辺りの骨である側頭骨、おでこの前頭骨、上顎の骨である上顎骨と接しているものです。

骨と骨とが接しているところが縫合部とよびますが、この縫合部は関節と同じです。

この翼状突起が上下にズレていますと当然上顎の歯の左右のドテの高さが高低があるだけでなく、左右の顔のゆがみが出てくるものです。そして必ず首の骨が生理的湾曲、つまり前湾曲でなく、後方湾曲になっているものです。

後方湾曲になっていますと、体全体の不定愁訴をもち、痛みも軽い症状が常に持つことになります。首の後方湾曲は外的障害を受けると必ずなるものです。歯の矯正治療、歯のインプラント、体に合わない薬を服用した、強い電波を受けた。必ず体全体の不定愁訴をひきおこすものです。

又、この左右の翼状突起が前後にズレだけをおこしていますと首の骨は真っすぐで、左右の歯の咬み合わせの高さが違っていることを意味しますがほとんどがこの混合型です。

②顎関節症をおこしていますと顎関節だけでなく、頭蓋骨の蝶形骨がズレ、捻れを起こしているものです。

そして、頭のテッペンの左右の中頭頂骨の片側の頭頂骨だけが下へズレをおこし、パンを下へ押しつぶした様にその側の顔のほほ骨は前に飛び出し、その側の頭の後の後頭部は後へ飛び出す格好になるものです。そして、その側の顎関節の隙間が前後に広くなり、反対側の隙間が狭いと下顎が狭い側に回転するものです。

そして、左顎の顎関節の隙間が広いと右側の肝臓に異常をおこし、肝臓が悪いと右の足のヒザ又は右の腕のヒジに異常がくるものです。右側の顎関節の隙間が広いと、脾臓にくるものです。糖尿病の人は必ず右の顎関節が広いという事です。

脾臓が悪いものですから自覚症状が無くても左の足のヒザ、左のヒジに反応があるものです。

左右共に顎関節の隙間が広い場合は肝臓も脾臓も異常反応を起こし、左右のほほ骨が前に飛び出し

下顎の動きがルーズになり、どこで噛んで良いのか噛む位置が定まらないものです。

その例と言えば、マウスピースを長期間装着したり、歯の全体の咬み合わせを高くしすぎた場合にもなるものです。

③又、歯のインプラント、矯正治療、自分の体に合わない薬、強い電磁波を受けた場合の外的障害を受けますと頭蓋硬膜の緊張が頭蓋骨及び体全体がギュート圧縮された状態の為に骨と骨との隙間が狭くなるものです。

例を挙げますと、歯の矯正治療をした人は頭のテッペンの中の左右の頭頂骨が下に圧迫され左右のほほ骨は前へ、後頭骨は後方にズレる為、顎関節の隙間が前後に広がる為レントゲンでは正常になったかの様に写るものです。口の中の左右の翼状突起のズレはそれ程変わらないものです。又、左右の足の長さも数ミリ位しか変わらないものですが、頭蓋硬膜の緊張を取り除きますと、左右の翼状突起のズレがはっきりと出てくるものです。又、左右の足の長さの差が2~3cmのズレがおこすものです。又、上下の歯の咬み合わせの高さも低くなるものです。

この様に外的障害を受けますと体全体が調子が悪く、不定愁訴を引き起こすものです。

又、薬では歯の矯正治療の場合と少し違って頭頂骨をはじめ、ほほ骨、後頭骨、その他のすべての骨がギュート圧迫された状態になり、全身の血流が悪くなるものです。体が弱っている状態で強い薬を服用すれば、ショック状態をおこすでしょう。又、インフルエンザは健康な人には病気にかからないものです。弱い人にはワクチンで予防するでしょう。それ以上に弱い人はワクチンでショックをおこすものです。抗癌剤も同じです。そして自分の体に合わない薬は毒の様なものです。腐った食べ物でも同じです。必ず右足が短くなるものです。

逆に薬の効能が強過ぎますと、必ず左足が短くなるものです。

共に肝臓に異常反応が出るだけでなく全身の血流が悪くなるものです。そして、左の顎関節の隙間が広くなり、下顎が右方向に回転するものです。

自分の体に合った薬ならば、左右の足の長さが揃うものです。そして、肝臓に異常反応はしないものですが、病が段々よくなってきた時には、その薬を服用していると、左右の足の長さが違ってくるものです。

④又、携帯電話を右手で持てば、右側の頭頂骨は下に押され、右の顔のほほ骨は前へ飛び出し、右の後頭骨は後ろにズレをおこし、右側の歯の咬み合わせがそっと静かに咬むと高く感じるものです。右側の足は短く、そして右側の内臓始め、右側だけ血流が悪くなるものです。左手を持てば、その逆です。

話は元に戻りますが、歯の咬み合わせが正しくなっているか確認する為には、頭蓋硬膜の緊張があるならば、それを取り除いた上で、口の中の翼状突起が左右・上下が対称になっているか確認することです。

頭蓋硬膜の緊張を調べるのは、下顎を右いっぱいにはずらしますと、左側の足は2~3cm短くなるものです。下顎を左いっぱいにはずらしますと右側の足は2~3cm短くなるものです。

数ミリしか動かないとか全く動かないと頭蓋硬膜の緊張をおこしているものです。つまり、神経伝達系統の不良となります。

左右の翼状突起が正しい位置に来ているのならば、全身の血流もよく、骨格のズレもほとんど無いものです。そして、体が軽くなっているものです。

病気をしているのならば必ず頭蓋硬膜の緊張をおこしているために全身の血流が悪く、車のラジエータが壊れたように熱がこもって全身が熱くなったり、逆に全身が冷たくなったりするものです。全身の血流を良くすれば、自然治癒力が出てくるものです。逆にその病気にはその薬が合っているが、自分の体に合わない薬を服用しますと逆効果がでて、血流が悪くなるものです。自分の血液は最高の薬です。そして、大切なのは顎関節症を治すと同様歯の咬み合わせの高さの調整が1番大事なことです。

この様に顎関節症を治すには頭蓋骨の骨を正しく位置に戻すには骨盤を始め、首の骨・背骨を正しく治した上で、頭蓋骨を調節した上で歯の咬み合わせのバランスをとらねばなりません。その為に世界的に顎関節症を治せるところが少ないということです。歯の矯正治療とかマウスピースだけでは治るものではありません。顎関節症を治せば、ノーベル賞もんとも言われる位、奥が深いものです。